

ふるさと 故郷と斎藤實

本年度は斎藤實生誕150年記念の年とあって、年間を通じて各種事業が展開されました。斎藤實の生涯と功績、影となり日なたとなって斎藤を支えた春子夫人について多くの皆さんに理解していただいたことを嬉しく思います。

さてこの稿では「故郷と斎藤實」のかかわりを2、3紹介してみたいと思います。

水沢には明治34年、表小路一番地を留守家から無償で借り受けてつくった私立水沢英語学会（後に商業高校に発展）がありました。斎藤は寄付金提供者の1人であり、ときには学校に顔を出して親しく英語のお相手をするなど学会の基礎づくりに物心共に貢献しました（講師として無給、無休で働いたのは八幡昭一さんなどです）。

内閣総理大臣時代には、農村匡救対策の一環として道路作りにも取り組み『水沢増田線県道開発』を願う住民（水沢、南都田、若柳）の要望もあり増田町を視察しています。橋のたもとで斎藤を出迎えた、小学校で挨拶をしたという記録が増田町に残されています。それが縁で増田町と水沢は親密な関係になって、今でも野球やテニスなどの交流試合が行われています。

また、水沢大通りから羽田町につながる道路が出来ることになったとき水沢青年会が「斎藤閣下のおかげで道路ができました。この道路には是非『斎藤通り』と名づけていただきたい」と当時の町長あてに書いたという請願書が残っています。

春子夫人が疎開してきて昭和20年から26年間旧宅に住んだこともあり、斎藤夫妻は市民に親しまれてきました。水沢小学校の校歌を聴いて涙したという斎藤實。故郷を愛し「将来自分の墓地は水沢に」と言ったという斎藤實。斎藤實は今、春子夫人とともに小山崎の墓地に眠っています。



斎藤實記念館

館長 菅原志保子

すばらしい青年だった

斎藤實は日本の魂と
欧米の精神を身につけた国際派、



斎藤實生誕150年記念事業の最後の催しとなる市民劇「陽だまりのなかの春子さん」は2月7・8日の両日、市文化会館（Zホール）で行われました。物語は、斎藤實を支え続けた春子夫人の回想という形で構成。深い愛情ときずなで結ばれた夫妻のドラマチックな生涯が描かれました。笑い、涙そして感動の舞台に、会場からは大きな拍手が巻き起こり、鑑賞した約2100人の観客は斎藤實の功績をたたえながら、生涯を閉じるまでの26年間、水沢の地で過ごした春子夫人をしのんでいました。

陽だまりのなかの 春子さん

●鳴り止まない拍手、感動の舞台

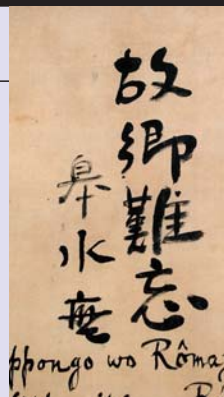


いま、再認識のとき 斎藤實の「自力更生」

斎藤實が総理大臣のとき、日本は経済恐慌で財政難に苦しみ、治安は乱れ政情は不安定という非常時でした。そのようななか實は「自力更正」をモットーとしラジオで国民に訴えるなどその普及に努めました。今、世界的な金融不安・派遣労働者の雇い止めなど日本経済は不安定です。實が唱えた「自力更正」。まさにわたしたちの生活に当てはまる言葉ではないでしょうか。生誕150年の節目のいま、改めてこの言葉の意味を考えるとときです。

水沢への想い 故郷忘れ難し

實は水沢の子どもたちのために昭和7年、斎藤邸の隣に鉄筋コンクリート・赤れんが併用の洋風文庫をつくります。そして自身が東京と朝鮮で持っていた蔵書を一般に公開。現在も約3万8,000冊が保管されています。また、東京水沢会の寄せ書きには「故郷難忘」と記し、水沢を思う強い気持ちをあらわしました。實の雅号は「皋水」。皋は沢をあらわす言葉で、水沢をこよなく愛したことが伺えます。



東京水沢会での寄せ書き

墨蹟からたどる 斎藤實の人柄

實は筆まめで、揮毫を頼まれると人柄の良さから断れず、休みの日でも朝から依頼に応えていました。円満な性格と気品が筆跡に現れています。その大変な作業に春子が付き添い、よく墨をする手伝いをしたといわれています。



實が愛用した書道用具

斎藤邸の柿の木 春子の實への想い

水沢の斎藤邸には1本の柿の木があり、實は幼少のころ、この木に登って遊びました。春子はこの木を見て、次のように詠んでいます。

ふるさとの 老木の柿は実りけれど
めでにし君は 今はいまさず

あなたのふるさと水沢の柿の木は実をつけましたが、愛しいあなたは今はもういないのですね。※当時の柿の木は今はありませんが、孫の木が育ってきています。



子どものころ遊んだ柿の木を懐かしそうに見上げる實